空を飛びたくて箒にまたがっても、歴史をまたいではいけない
―箒にまたがる事について―

吉田慎司

ほうきを作っているとよく「飛べそう！」と言われたり、遠慮のない方だと、その場でまたがって見せる人がいる。（こちらが枝を使ったり、可愛らしい箒を作っているせいもあるのだけれど）

「キキみたいだね！」（またはサリーちゃん、またはサマンサ…）などと言っているならばまだいいのだけれど、それ以上歴史を深堀りすれば、少し詳しい人なら、あまりいい顔はしない。それは魔女の歴史、そして箒にまたがる事の後ろ暗さに触れてしまうからだ。箒にまたがる事の意味、経緯、そして現在の在り方について、幾らか調べて、まとめてみました。

魔女の歴史は古い。そして、幅広い。魔女、すなわち、超人的な力を使う人の伝承は世界中にあり、彼女らは、当然のように空を飛び、魔法を使う。古く有名な所で言えばエジプト神話のイシスはそもそも羽が生えているし、ギリシャ神話にも多くの魔法を使う女性がいる。日本の天女や山姥も、広義では魔女に分類されるかも知れない。

しかしここで、そうじゃない！という声も聞こえてきそうだ。いわゆる黒い帽子と黒い服を着て、鼻が高く、鷲鼻で、箒に乗って空を飛び回る。というイメージの、ヨーロッパの魔女像が出来上がるまでには少し時間がかかる。俗信を越えて、広範囲にイメージが固定されたのは中世ヨーロッパについて知らなければならない。

１７世紀には、アイザック・ニュートンやフランシス・ベーコンなど、多くの哲学者や科学の基礎を築いた人物はいたけれども、彼らも依然として悪魔や魔女を信じていた。そしてその語りは、神学的な要素に多く彩られている。そして当時、魔女がいたかいなかったかと言えば、いたと言っていい。

現在のような科学発生前の中世には医療がなく、田舎には占い師や民間療法家がいた。錬金術師が、賢者の石やエリクサー、不老不死を求める過程で調合

や精製が発達してきたように、多くの民間療法(現在では眉をしかめるような方法や、いわゆる魔女のそれと言われるようなものも少なくない。動物の糞や虫、内臓などを煎じたり、調合する伝承や書物が多くある)の中には、薬草もあれば毒草もあり、祈りもあれば呪いもあって、学問や民間信仰、キリスト教の境がない時代は、現代から見れば混沌としていた。(民間療法の薬品が、実は空飛ぶ魔女の根拠なのだけれど、また後述する。)

中世の魔女のイメージを固定したムーブメントとして、魔女狩りを避けるわけにはいかない。魔女狩りは、異端狩りが発端だった。法王インノケンティウス三世(在位 1198-1216)の頃には聖職者の腐敗が著しかった。そこで、リベラルな南フランスで、アルビ派やヴァルドー派による宗教改革運動が起き、勢力を伸ばす。すると法王は、十字軍を派遣して虐殺を始めた。その後、修道会や異端審問制、検察省が設立され、合法、またふぁ違法の裁判、拷問、資産没収が横行していくが、異端審問を越えて、魔女に特化して魔女の習性や裁判方法、拷問や強制自白の方法を決定づけたのが、『MALLEUS MALEFICARUM』(邦題:『魔女への鉄槌』-1485年)である。

『魔女への鉄槌』は、1669年まで版が繰り返され、続々と続く魔女論と虐殺への礎となった。ここで一度、魔女のイメージは一本化されたが、この本一冊がヨーロッパの魔女像を統一した、というよりは、この本を基に制度化された事が大きい。当時のフランスの裁判官の尋問の項目には

一　お前は魔女になってから何年になるか
六　悪魔にどんなことを誓約したか
十　集会では何を食べたか
そして
二十三　箒の柄に塗った軟膏は何で出来ていたか
などが上げられている。

その後、人類史上類をみない凶悪かつ残忍な拷問の中で『魔女への鉄槌』に沿った証言が集められ、記録されていった。その内容は公的な記録として蓄積されていったし、しばしば、巨大な祭典として魔女達を火あぶりする際、罪状は仔細に読み上げられ、一般にも魔女のイメージを広げていく事になる。こう書いていくと、箒にまたがって空を飛ぶ魔女というのは全くのでっちあげのようだけれど、火のない所に煙は立たない。幾らか、事実を元にしたと思われる証言も少なくない。

1545年に教皇ユリウス3世の医師だったアンドレスラグーナは
「瓶に半分ほど入った緑の軟膏...それを各々で塗った…ハーブで出来ていた…ヘムロック、ナイトシェード、ヘンベイン、マンドレーク…。私は、丈夫な箱を、瓶でいっぱいにするよう指示もしていた。私は絞首刑執行人の妻に、不眠症治療として軟膏を施した。 塗ると直ちに、茹でられた野ウサギのように彼女は目を見開らき、かつ深い眠りについた様だった。 もう、どうやって起こすかも分からなかった。散々手を尽くしたが、彼女が目を覚ましたのは36時間後だ。そして「なんて悪いタイミングで起こしたんだ！私は世界中のすべての喜びと快感に包まれていたのに！」と叫んだ。」

の記述があるそうだ。
　供述が真実かどうかは別として、ヘムロック、ナイトシェード、ヘンベイン、マンドレークなどはどれも神経毒で、現在でも幻覚作用があるとされている。

ヘムロックは毒ニンジンとも呼ばれ、鎮静作用もあるが、ソクラテスの処刑にも使われた草。
ベラドンナ(デッドリーナイトシェード)は嘔吐、撹乱、幻覚、瞳孔散大の作用がある。
ヘンベイン(ヒヨス)にはトロパンアルカロイドが含まれ、やはり幻覚作用や瞳孔散大作用などがある。
マンドレイクは、よく魔術の伝説の中で語られるマンドラゴラと同じもので、やはり鎮痛、鎮静作用もあると同時に、幻覚、幻聴、瞳孔散大作用があるとされる。
これらを調合して、向精神薬や麻酔として使うことは古くからあったらしく、幻視や浮遊感覚を伴うともされている。

　実は、先ほど紹介した『魔女への鉄槌』の中では、箒の記述は少ない。魔女は夜間に飛んで集会をする。とされていたが、
「現在の魔女の移動方法としては、軟膏を用いる。洗礼前に殺した幼児の肢体で作った悪魔の道具で、椅子や箒に軟膏を塗る。すると彼女らは直ちに浮かび上がり、姿を消して、日夜思い通りの場所へ行くことが出来る」
の一節に出てくるのみである。

　軟膏に幻覚作用や浮遊感があるとして、何故箒に塗りつけるのかという疑問があるかも知れない。上述したように、軟膏はドラッグであり、猛毒でもあるので、一度棒などに付けてから、額や、脇腹など皮膚の薄い所、粘膜に直接付

けるという方法が用いられてたらしい。

『魔女への鉄槌』での記述が少ないように、当時の魔女の絵画を見ても、全てが箒に乗っているとは言い難い。生身で飛んでいるケースもあるし、棒がある他の農具や、動物に乗っている事も多い。そもそも、異端審問が発端なので、罪状は色魔や魔女の集会(サバト)、悪魔との契約などが多いので、魔女＝箒のイメージがより強固になったのは、魔女狩りの収束した十七世紀以降になる。十八、十九世紀にかけて、ロマン派の絵画や文学、音楽や、グリム童話など、物語として魔女や魔法は扱われるようになった。魔女狩りの脅威を考えれば、扱えるようになった。という方がいいかも知れない。

魔女狩りの旋風の吹き荒れる中では、進んで魔女の記述や作品などを発表したら、即座に裁判にかけられたはずだ。(財産を没収するので、教会や国の資金集めの方法でもあった。)魔女の嫌疑をかけられたら、全身の毛を剃られ、万力で四肢を引き伸ばされ、後ろ手に結ばれたロープで天井まで引き上げては何度も落とされ、木ネジで指を潰し、爪と指の間に木の楔を打ち込み、焼けたペンチで肉をちぎられ、水の中に沈められ、全身に太い針を刺された。自白をすれば時間をかけた生木の火あぶりではなく、絞首刑にしてやるという恩赦を受け、街中を引き回されて知人一人一人に対して、魔女だと供述しなくてはならない。財産は全て没収され、自白による絞首刑の約束すら反故にされ、１時間以上をかけて苦しみながら生木でじっくり焼き殺される。実の子どもはその姿を見せられながら、丸裸にされて鞭打ちを受ける。などなど、これはまだ一部で、これらの手順、拷問方法が正義として、国家ぐるみでマニュアル化され、２００年近く繰り返された。犠牲者は、三十万人とも、三百万人とも言われている。処刑は、何日も続く祭典として開かれる事もあったので、その恐ろしさも、多くの市民の知るところであったろう。

そんな、あまりにむごたらしい歴史があっても、魔女や魔法は人を惹き付ける魅力があったらしく、後年、多くの作品の中でモチーフとして現れ続けている。(ちなみに、グリム兄弟の白雪姫では、王妃が焼けた靴を履かされて死ぬまで踊らされる描写があるけれど、熱した鉄の長靴を履かせてから、ハンマーで足を叩き潰すのは魔女への拷問の１つだ)

現在では、アニメや映画のモチーフなる事が多く、時を経るにつれて、暗い歴史や怪しさと繋がる現実ではなく、純然たるファンタジーとして扱われているように思う。マスメディアとしては、「オズの魔法使い」や「メリーポピンズ」、「奥様は魔女」などは比較的初期に入るかと思うけれど、どれも、殆んど魔女狩りの行われなかったアメリカの作品だ。「ハリー・ポッター」のイギリスも、

大陸から離れていた事もあり、魔女狩りの被害は少ない地域だった。現在生きる我々の中には、この辺りの作品で、魔女のイメージを覚えた人も少なくないだろう。そして冒頭にも書いたけれど、その歴史の悲惨さ、重たさを知る人は、場合によっては眉をしかめることもあるだろう。

すっかり魔女そのものの歴史が長くなってしまったけれど、この文章では現代において、箒に跨がる事の是非を考えているのだった。現代でも、ファンタジーをファンタジーとして成長させる事は素晴らしい事だ。元は俗信から発展したものでありながら、現代でも神秘が人を惹き付け続ける、という事にはどこか、魔法が人と切り離しがたいリアリティが含まれていることの証であるようにも思う。

とはいえ、どんなにミリタリーがファッションとして流行ったとしても、戦国時代がコンテンツとして消費されようとしても、その下では、本当の命が失われていた事を、人はどこかで知らなくてはいけない。先のオリンピックでは、ユダヤ人虐殺をネタにして降ろされてしまったクリエイターがいた。ものを生み出す人は誰もが、その媒体に歴史を１つ積み重ねる事を避けることは出来ない。それがどんなに薄い紙一枚だとしても、それが何に紐づき、何を背負い、どこへ向けられているかは、自覚しなくてはならないはずだ。

ファンタジーや幻想やロマンは、人類の偉大な発明であると思う。同時に、過去の惨劇を学び、歴史を繰り返さない事も人間には必要な事だ。まして、道具は抽象的な表現ではなく具体的な歴史そのものなので責任は大きい。

それはそれとして、楽しんでいる人にいちいち水を差すほどロうるさくあろうとも思わない。けれど、目の前で売り物に跨がるのは、勘弁戴きたいとは思っている。

参考資料

『魔女狩り』森島恒雄（１９７０年・岩波新書）

『魔女狩り』ジャン－ミシェル・サルマン（１９９１年・創元社）

『Murder, Magic, and Medicine』John Mann（Oxford University Press・1994）

『The Hammer of Witches: A Complete Translation of the Malleus Maleficarum』Christopher S. Mackay（Cambridge University Press・2009）

「クラフト叢書・番外編」WEB限定発行 2021/8/12

©2021　**吉田慎司**

http://shinjiyoshida.main.jp/

挿絵・Jun Sasaki